
ソードアート・オンライン ～弓兵が往く！～

AMEKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン ～弓兵が往く！～

【Nコード】

N8090P

【作者名】

AMEKO

【あらすじ】

SAO事件に巻き込まれた少年、カミネの歩む道

注・某赤い英雄は出てきません。

少年はゲーム好き！（前書き）

いつもどおり衝動で書きました。

転生物にしようかと思ったのですが、それはなにか違うような気がしましたんで新しい人を投入しました。

・・・てか弓使わせようと思うんだが、弓使いとかいなかった気がするぜ！？

少年はゲーム好き！

少年、高峰隼人はゲーム好きである。

無類というには足りないが、それでも幅広くやっているほうだ。

特にFPSやシューティングゲームが好きで、休みの日などはほぼ一日中やっており、一つのゲームを飽きぬくほどにやりこみ、飽きたら他のゲームへ移行し飽きぬくほどやりこみ、また他のゲームへ移行し、やりこみ、移行する。

さらにまた最初のゲームへ戻ってきてまたやりこむ。

基本的に飽きたらやめるので、クリアしていない所や持っていないアイテムなど、やりこんでいない場所が多々ある。

その部分を埋めるべく、また、やりこむ。

この少年、高峰隼人はゲーム好きである。

その少年に、情報が飛び込んできた。

ソードアート・オンライン

それは、ヴァーチャル空間へと完全に飛ぶ、なんとも驚きの機械ナーヴギア によって仮想空間へ飛ぶ『フルダイブ』という技術を利用したゲームである。

当初、ナーヴギアが発売された時は、100mも進んだら壁に突き当たったりとしたものや、パズルや知育などぱっとしないものばかりだった。

しかし、このソードアート・オンラインは、アインクラッドという100階層からなる巨大な城の攻略を目的としたRPGであった。

その少年、高峰隼人はゲーム好きである。

無論、ナーヴギアは購入済みで、あとは発売日を待つだけであった。

一応ベータテストには応募したが、正直当選するとは思っていない。なんせすでに8万人もの人が応募しているというのだ、応募終了には10万人に届くと思われるそれに当選するなど、宝くじに当たるようなものだ。

まあ、駄目で元々で応募しただけである。

なにはともあれ、あとは発売を心待つばかりである。

高峰隼人は、ゲーム好きである。

少年はゲーム好き！（後書き）

少年、俺は飽きやすいのである。

というかなぜ俺はある口調なのだろうかw

ブログとか書きにくくてしかたがない

そしてブログで燃え尽き終わる罫

今度こそは書き続けるさ！！

ベータテスト・当選

今日も今日とて世界は廻る。

たとえ偽りの世界でも一日は一日だ。

だが、この一日は記念すべき一日だ。

なぜか？

それは
・
・
・

[illegible]

「すっげえ……」

高峰隼人の第一声はこんなつぶやきからだった。

そこは、始まりの街。

自分のキャラクターを作り、第一歩を踏み出す最初の街だ。

そして、ソードアート・オンライン、通称SAOの始まりの場所。

そんな場所に、誰が見ても整った美形の顔をした青年が呆然として
いる。

というか、数人。

彼らは、呆然としていた。

「これがSAOか!？」と。

そんな感じで、高峰隼人のキャラ・『カミネ』のベータテスト当選者として【ただの】ゲーム攻略が始まった。

[illegible]

それから数分間、一人が動き出すのを皮切りに、それぞれが動き出した。

ある者は街を見に行き、ある者は広大な草原へ、ある者はイベントリーを開いたり、ある者は奇声を上げていたり、それに混ざってたりしていた。

「ヒヤッホウッ!」「ヒーハー!」「うおおおおおお」「すあああfffんfyフあjfd」

・・・自分は奇声組に関わらないように武器屋へむかった。

ちょっと混ざりたかったのは秘密だ。

- - - - -

それから数時間後、俺は草原に来た。

無論戦うためだ。

このゲームの目的は100階にもなるダンジョンの塔、
アイंक
ラッド の攻略だ。

せっかくベータテストに当選したからにはできるだけ攻略をしたい
と思っている。

というわけで『レッスン1・ソードスキルを使ってみよう!』だ。

このSAOは、魔法という物は大胆に排除され、代わりにソードス
キルという必殺技的な物が無数にある。

それがモンスターとの戦闘の鍵を握るものに違いないと思っている。

まず武器屋で初期の剣を売り、短刀で唯一買える 小刀 を買い草
原の狩場へ来た。

設定されている短刀のスキルは、小刀用基本技『カット』だけだ。動作のモーションはスキル詳細にムービーとして載っているのをそれを参考にして練習を開始する。

まず短刀を右手で逆手に持ち、短刀を地面と垂直にし刃を下にして体の横に置く。

体は左手足を前に置き少し半身に構え、足の幅は肩幅程度に開く。

そして右足を大きく前に出し、それと同時に短刀を引き抜くようにして斬り上げる。

ザンツ！！

と気持ちの良い音が響き、モーションが終わった。

途中までは自分の意思でやっていたが、途中からは引っ張られるように技を繰り出していた。

「これが モーションアシスト ってやつか」

モーションアシスト

ソードスキルを使うときのサポートシステムで、初動のモーションさえ出来ればあとは勝手にやってくれるというシステムだ。超便利。

「そんじゃ、ま」

やりますか！

ベータテスト・当選（後書き）

このあとはしばらく狩り狩りしてレベル上げしましたという流れです。

誤字報告やアドバイス、感想などをいただけるとすごくがんばれます。

よろしくお願いします。

ダンジョン攻略・顔合わせ

現在8レベ付近までソロ狩りで上げ、倒木に腰掛け一休みしている時に声がかかった。

いよいよボス部屋が見つかり、ボスの攻略戦が始まるのでそれに参加してほしいと一声がかかった。

どうやら大体のプレイヤーはモンスターの迫力にびびって戦いにならず、1レベか2レベほどらしい。

慣れてしまえばたいしたことはないのだが、何度も殺されたおかげでトラウマとなりつつあるそうだ。

おかげで、レベルを上げているだけである程度は強いと認識されるそうだ。

どうりで、ソロにもかかわらず声をかけられたわけだ。

「それで返事のほうはどうでしょうか？」

声をかけて来たのはなんと女性プレイヤーだ。

美人に作られた顔を不安そうにさせ聞いてくる。

正直、美人と二人きりというのが耐えられない感じた。

リアルの方では基本的にはゲームをして、学校では読書三昧の日々だ。

会話も相手から話しかけてこなければなかなか喋らない受動態で、一日何も喋らないまま一日が終わるなんてことも時々あったくらいだ。

ようするに対人経験が少ないのだ。

対人スキルがあつたら今頃は他の人とパーティーを組んで狩りをしたり、初心者サポートをしたりして、ソロ狩りなんてやっていないだろう。

それをいきなり美人を送ってくるとはどういう用件だ！！
・・・攻略か。

「あの〜」

「ああ、ごめん。少し考えていた」

「で、返事はどうでしょう」

そうか、攻略の返事か。忘れていた。

「わかった、行かせてもらっ」

「ほんとですか！！」

「あ、ああ」

さっきまで不安でしかたなかったとばかりの姿を一瞬で変え、天真爛漫という言葉が似合いそうな笑顔を浮かべる少女。
そしてテンションの変わりように若干引きぎみのカミネ。

「それじゃあ、ええつと。これかな？違った、レシートだった。・
・これだ！！
ごほんっ！

明日の午後4時に始まりの街の広場の噴水に集合。

ダンジョンボス部屋まで5〜6レベの護衛を付け、徒歩で移動のち
攻略へ移ります。

報酬は金は山分け、アイテム等は欲しい人がいたら挙手をする形で、
欲しいアイテムが被った場合は交渉もしくはデュエルで決めてもら
います。

以上です！」

ポケットから出したメモを丸読みした。

少女はやりきった顔をしている。

カミネはイラつとした。

「ていつ」

「はう！？」

でこピンをした。

少女に1のダメージ。

少女は涙目になり上目遣いになった。

カミネ、大ダメージ。

「な、なんですか？？」

「ごめんごめん、つい

で、明日の午後4時に広場の噴水前だね。」

「うん、そうです」

「君も参加するの?」

「はい、頑張りますよ!

というか、君というのはやめてほしいのですよ。」

「わかったよ。

というか自己紹介してなかったね、俺はカミネ。短剣使いだ。明日はよろしく」

「はい!

私はアイナといます。大剣使いです。こちらこそよろしくです!」

そんな感じで、少年は少女に出会った。

1日後、噴水前で顔合わせをした。

4〜6レベルの4人グループが護衛に付き、主戦力を消耗させずにボス部屋まで送り届けるそうだ。

ほかの主戦力の人達は互いに挨拶をしたりアイテムを確認したり情報交換をしたりと各々が別々に行動している。

どうやらソロプレイヤーが半分で、残りの半分はグループを組んでいるそうだ。

・・・大丈夫か？と不安を覚えた俺はソロプレイヤーだった。

とりあえず挨拶回りへ行こうかと迷ったがやめ、近くの壁に腕を組みつつもたれかかり、合図があるまで待つ。

「おーい、かみねさん」

昨日会った少女、アイナが手を大きくブンブン振りながら大きな声で呼びかけながら近づいてくる。

「よう、遅かったな。寝坊か？」

「違いますよう、お兄ちゃんがなかなか変わってくれなくて遅れちゃったんです」

「え？兄のを強引に借りてやってるってことか？」

正直絶句だ。

「大丈夫です、お兄ちゃんシスコンですから！！」

正直超絶句だ。

「そ、そう。ヨカッタネ」

「はい！」

輝くような笑顔を浮かべてもためです。

その後、ボス部屋に付くまでずっと（アイナが）喋っていたが他のプレイヤーの刺すような視線が痛かった。

ダンジョン攻略・顔合わせ（後書き）

ボス部屋までやろうとしたんですが、難しいですね。
ヒロインはアイナで行こうと思っています。
後、俺文才無さすぎだろorz

ベータテスト・終了（前書き）

短
い
っ
す

ベータテスト・終了

ベータテストが終わった。

100階にもなる巨大な塔の攻略に誰よりも心血を注ぎ、無理と言われた単身でのボス攻略すらやり遂げ、攻略グループと言われる最前線で戦い塔を攻略する人達の中のトッププレイヤーの一人にも数えられた。

楽しい時間だった、だけど、終わりの時間が来た。

ベータテスト終了という形でSAOの世界に魅了された一人の少年・カミネの戦いは終わった。

ベータテストで育ててきた自分のキャラが消されるのはやるせない気持ちはあったが、それでも高峰はカミネとして良く善戦したと思っ
っている為か、そこまで悲しくはなかった。

さて、明日は学校だ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「というわけでさ、しばらくずっとSAOやってたんだ」

「というわけ、と言われても話がさっぱり見えないんだけど」

冷静に突っ込み担当からの突っ込み（？）を受け、少し補足。

「いや、ほつとしてすまないって話だ。

SAOのベータテストにかかりきりで全然遊べなかったからその謝罪だ」

「ああ、っていうかベータテスト当たってたんだ、当たってたんだ！？」

「偶然な」

驚いたという表情を浮かべるが俺も当たった時はそんな感じだったよ。

「その偶然俺に分ける、というか分けてくださいー！」

いきなり会話に入ってくるアホ一名。

「晃^{しゅん}二、もうSAO終わってるからね」

「それを言っ^{たくみ}なよ拓海さんや」

「あはは」

現在、机をくつつけて弁当を突付きながら3人で昼食中だ。

紹介しておくと、突っ込み担当の佐々岡^{ささおか}拓海、愛称はタク。ボケ担

当の倉塚晃二くらつか けいじ呼び名は晃二。

拓海は線の細い体で気性も穏やか、しかしなかなか鋭い突っ込みを入れてくるし、大抵のネタは拾ってくれる優秀なツツコミニストだ。晃二はなかなかがつしりした体で、気立ても良く、とてもゲーム好きとは思えない感じだ。あとアホ。

この二人は小学校のころからの付き合いで、今では親友とも呼べる仲だ。

恥ずかしくてそんなことはとても言えないが。

「でさ、SAOはどんな感じだった？」

「やればわかる」

「・・・外道って知ってる？」

「俺の夢はフランクな外道だ」

「お願いだから人道に留まってて！」

SAOの情報が聞きたいのだろうが俺にはあのゲームを表現する自信はない。

たとえば言ったところでわからんだろうしな。言ったところでそれが感じられるわけでもないし触れもしない。それに言葉にしてみてもわからないまま納得してしまうよりも実際にやってみようほうが断然良いに決まっている。

ようするに実際にゲームをやったほうが早いってことだ。

その後も内容を聞いてきたが「やったほうが早い」「できる、君ならやれる!」「見るんじゃない、感じるんだ」とか適当に言っ
てごまかした。

結局聞くことをあきらめ、何の変哲もないくだらない話をしたり遊
ぶ約束をしたりアホをパシツたりしてしばらくやっていなかった親
友達とのかけがえのない日常を楽しんでいた。

S A O 発売までもうすぐといった頃の話だった。

ベータテスト・終了（後書き）

短
い
っ
す
よ。

SAO・開始

「やって。」

「きました。」

「この世界。」

「「SAOキタゼーーーーー!!!!!!」」

「なおかつ、俺だけはこう叫ばしてもらおう!」

すうう

「SAOよ!、私は帰ってきたーーーーー!!!!!!あと一人だけごめんね!」

久しぶりのSAOでテンションがマッハでぶっぱでカオスエメラルドだ。

思い出すのは最初に来たときにいた奇声組の異様なテンション。

絶対にああはなりたくないと思っていたが馬鹿二人に釣られて奇声組に仲間入りしてしまった。

そして次の瞬間orzしてしまった。3秒で持ち直したがやはりシヨクだ。あと恥ずかしい。

さて、御分かりだと思うがSAOを3人とも無事手にいれて初プレイだ。

ベータテスターとして優先購入権がある俺は徹夜をして店に並ばなくても手に入るのになぜかしら並ばされたのはいい思い出ということ

とにする。

悪いと思う思いは全て右足に乗せて晃二へと放たれたのは完全に蛇足だ。

キャラの名前だが、ベータテストをやった時と同じくカミネという名前を使うことにした。

そしてタクはどこかのアニメからツヴァイという名前が気に入り、ツヴァイという名前を長いあいだ使っている。

晃二のキャラの名前は、戦争ゲー好きのためか和訳で戦争という意味のWARという名前にしたらしい。
ウォー

容姿を一応言うといケメンのダンディー系とクール系。

というか見渡す限り全員イケメンだ。

「なあたかすげえよすげえ！」

ちなみに“たか”とは俺のニックネーム的なもの。そして揺らすな。ガツクンガツクン揺らすな！

「リアルの愛称を言うな、そして揺らすな。ツヴァイ、お前はずいぶん落ち着いてるな。そして揺らすなつつてんだろ！」

ガツクンガツクン

「まあ、ウォーが先にはしゃいじやって乗り遅れた感じかな。あと興奮してるのはわかるけど少し落ち着きなよ」

ピタッ

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

「まだ興奮しすぎて混乱中か。それよりもなぜツヴァイが言った途端止まった」

「神の思し召しだ」

「ツヴァイ、お前はウォーの神らしいぞ」

「つまり僕は戦争のだと、いつとくけど僕を拜んだら負けるよ？」

「氏ね神」

「灰と化せ馬鹿野郎」

うーむ相変わらずのgdgdだw
だがgdgdやってると貴重なゲーム時間が削れてしまう。

「はいはい、とりあえずそっちに武器屋あるから行くぞ」

「なるほど、そっちだな！行くぞツヴァイ！」

ガシッ

「え？つて引きずんなよおおおおお」

興奮で爆走するウォーとなぜか引きずられ、ドップラー効果をゲーム内に内蔵していることを指し示してくれているツヴァイ。

「カカカカカ」

一人笑う俺。

うん、シユール（笑）

「なあ、ちよいとレクチャーしてくんねえか？」

「へ？」

相変わらずの暴走っぷりだなあwなんて考えていたら声を掛けられた。

「あんたから移動してないのに武器屋の場所がわかるってことはベータテスターだろ？」

なかなか鋭い。

・・・訳も無い、普通に考え付くことだ。

「まあそうだけどさ、悪いけどさっきの連れがいるんでね。

なあ、それよりもあいつ見てみるよ。やけに迷いが無いダツシユをしていると思わないか？

まるでベータテスターのようだ！」

秘儀・なすりつけ！

久しぶりだな、キリトさんや。何回か会っただけだろうがな、俺はしっかりと覚えていたぜ！

そしてさっそくだが、俺のために犠牲になってもらっぜ！

にやり

「確かに、まるでベータテスターのようだな。じゃあ俺はあいつのところ行って見るわ。」

「がんばれよ」

「おう！っというかお前名前は？」

「人に尋ねる時は自分からだろ、まあいいけど。俺はカミネだ」

「悪いな、俺はクラインだ。また縁が合ったら礼はするぜ。じゃあな！」

「期待しないでおくさ、じゃあな」

そう言うなりすぐさまダッシュし、あの小さい背を追いかける。

なにやら忙しい奴だった。

ん？メールボックスに受信あり？

件名：【迷った】

本文：【タステケ】

・・・はあ

SAO・開始（後書き）

駄文率100%

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090p/>

ソードアート・オンライン ～弓兵が往く！～

2011年4月18日12時32分発行